

〔注意〕

答えはすべて、解答用紙の定められたところに記入しなさい。
本文には、問題作成のための省略や表記の変更（へんこう）があります。

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

友だちといっしょにいると楽しいですね。動物も同じでしょうか。

海のギャングと呼ばれるクジラの仲間、シヤチは集団で狩かりをするのが知られています。かれらは十頭ほどの群れをつくって魚の群れを狩ります。獲得量かくとくりょうは、一頭より二頭、二頭より三頭と、群れの大きさが大きくなるほどふえていきます。ところが、三頭を超えると、一頭あたりの獲得量が減っていきます。とれるえさがふえても仲間で分け合うので、一頭のとりぶんが減ってしまうのです。それでも、一頭だけで狩るよりたくさんえさがとれるので、群れにはどんどん仲間が加わってきます。

十頭を超えると、今度は群れからはなれるシヤチが出てきます。一頭あたりの獲得量がひどく小さくなってしまいうからで

す。

① この結果から、シヤチはいつも「ましな方」を選んでいることがわかります。みんなが利益をもとめてかしく行動すると、だれも利益を得ない、という皮肉な事態につながるのですが。

不思議に思うかもしれませんが、これが仲間をつくる理由のひとつです。② 決して「得」をしないのに、「損」をするこ

とはさげたい。「損」がさけられる限り、仲間をつくろうとします。

また、もうひとつ理由があります。いいえさがあるか、どこにあるのか。これらのことを、ほかの仲間から学ぶことができるといふことです。

たとえば、ネズミは初めて出合ったえさは、すぐに食べません。毒があるかもしれないからです。近くにいるネズミの口

のにおいをかいで、同じにおいがすれば食べ始めます。仲間をつくれれば、たいせつな情報が手に入ります。

カナダの鳥学者、ルーク・ジラルドゥーさんは、ムクドリの実験をして、かくれたえさを手に入れる方法が二つあること

をつきとめました。

直径十メートルの大きな鳥かごを用意し、十羽のムクドリを入れます。地面にはせまい穴が四十個ほってあります。穴の中には、人間がえさを入れておくのですが、えさが入っているのはその一部分の十個ほどです。

この実験から、一羽のムクドリが「農民」と「山賊さんぞく」の二つを使い分けていることがわかりました。

農民とは、一羽でえさを探してとることです。

山賊とは、農民の行動を見つめているほかの鳥たちのことです。近くにいる農民がえさを見つけると、とびついてそのムクドリのえさを横取りするのです。

ジラルドゥーさんによると、農民か山賊かは目で見分けることができます。

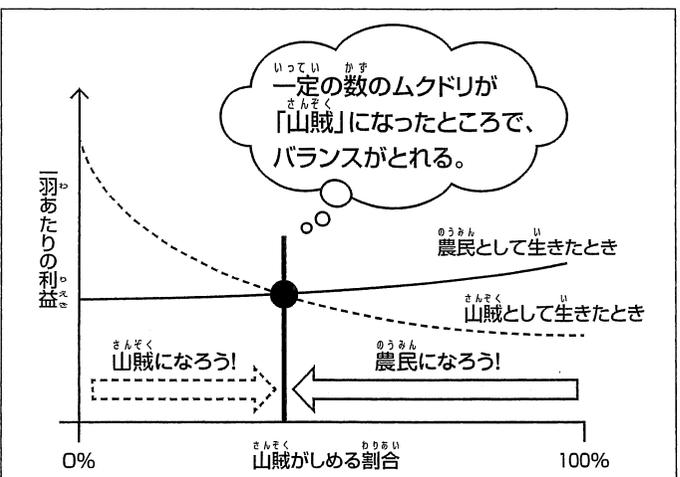
目線が低いムクドリは、地面にかくしているえさを探す農民、目線が高いムクドリは、農民がえさを見つけた瞬間しゆんかんを見のがさない山賊なのだそうです。

山賊はいつでも得をしていて、農民よりたくさんえさをとっているでしょうか。必ずしもそうではありません。グラフ参照。
 グラフは山賊をするムクドリ^{ムクドリ}の割合を横軸^{よこじく}にとっています。縦軸^{たてじく}は、農民と山賊の、それぞれの利益を表しています。
 百羽中一羽だけが山賊なら、山賊はもうかります。周りのすべての鳥からえさを横取りできるからです。あまりにもうかるので、農民をやめて山賊になろうとする鳥が出てきます。山賊は二羽になりますね。それでも農民は九十八羽いますから、山賊は③まだまだいい商売ができます。

このように、山賊がどんどんふえていくとどうなるでしょう。アの^アに、横取りする山賊はふえていく一方です。そのうち、山賊として生きるより、農民として生きる方がよくなってきます。そこで、「足をあらって」農民にもどるムクドリが出てきます。

シヤチの場合と同じようなことが起こっているのです。山賊と農民、どちらがより得をする、ということはありません。実際、ムクドリの場合は、何割かの鳥が山賊としてふるまった状態で、つりあいがとれています。

このように、生物として正しい行動は一つではありません。仲間をつくる^{つくる}とき、進化の働きは、一人ひとり（一頭一頭、一羽一羽）にちがった行動を生み出す力を持っているのです。



(松島 俊也『動物に心はあるだろうか』による)

問一 ― ①「この結果」について、本文から読み取れるものを二つ選びなさい。

- ア 一頭あたりの獲得量^{かくとくりょう}は、十頭の群れで狩りをしたときがもつとも多い。
イ 一頭あたりの獲得量は、三頭の群れで狩りをしたときがもつとも多い。
ウ 一頭あたりの獲得量は、一頭で狩るよりも十一頭の群れで狩るほうが多い。
エ 一頭あたりの獲得量は、一頭で狩るよりも八頭の群れで狩るほうが多い。
オ 一頭あたりの獲得量は、二頭の群れで狩るよりも四頭の群れで狩るほうが多い。

問二 ― ②「決して『得』をしないのに、『損』をすることはさけない」とは、どういうことですか。

問三 ― ③「まだまだいい商売ができます」とありますが、ここではどういうことですか。

問四 ― アにふさわしい内容を考えて答えなさい。ただし、「農民」・「えさ」という語を両方用いること。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

秋の陽は落ちるのが早い。あたりはすでに薄暗く、風も出てきた。足元で、枯葉が、がさが音をたてている。一人公園を抜けようとして、智樹は思わず小走りになった。すると、背後から、同じように走ってくる足音が聞こえる。

「智樹くん」

同じクラスの鈴世だった。家がちょうど同じ方角にある。

鈴世ははあはあ、息を荒げていた。わざわざ追いかけてきたのだろうか。

「よかった、暗くなると怖いもん。いっしょに帰ろうよ」

そうだ、鈴世は女の子なのだった。女の子が困っていたら、助けてやりなさい、その子が可愛いなら、なおさらね、とお父さんはふざけていつも言う。鈴世は可愛いというタイプではないが、それでもひとりには心細いだろう。

鈴世とは保育園時代からずっといっしょに大きくなった。どこかに兄弟姉妹のような感覚がある。実は鈴世のほうが、よほどしつかりもので、現実認識に長けていたが、頼られると、智樹は自分が強くなったような気がし、そうして、いいよと胸を張って答えた。

二人は並んで歩き始めた。

「智樹くんってさ、歌うまいよね。うちで特訓しているの？」

「まさか。別に。何もしていない」

何もしていないというその言葉を、①鈴世は少し警戒した。けれどすぐに、智樹の場合は、ほんとうに何もしていないのだろうかと思直した。

実際、彼は「練習」ということを知らなかった。なにかをうまくやるためには、くりかえし努力し、何段階かを経たのちに、ようやく達成できるのだということを知らなかった。

歌に関してだけは、彼は、いきなり、初めから、できた。それで、歌に関してだけは、できないということがわからなかった。誰もが自分のように、いきなり、歌えるものだと思っていたのだった。

②でも人間は、雲雀ではない。

「あたしはあ、歌うの、大嫌い」

「なんで」

「だって、うまく歌えないんだもん」

鈴世は暗い目を、公園の樹木に向けた。視線の先には大きな蜘蛛の巣があって、夕陽にきらきら輝いている。智樹は思わず、「きれいだな」と言った。

「え？ 何が」

「蜘蛛の巣だよ、蜘蛛の巣がある」

「あ、ほんとだ」

「すげえな。こんなに大きな蜘蛛の巣、初めて見たよ」

「ほら、虫がかかっているよ、まだ、生きてるよ。蜘蛛、食べるかな、食べるかな」

「うん」

二人は、じつと蜘蛛の巣を見詰めた。捕えられた虫のほかに、枯葉が何枚も、ひっかかっていたが、肝心の主の姿がない。

みごとな蜘蛛の巣を眺めながら、智樹は去年のキッズフェスタを思い出していた。

担任だった小松先生は、一人ひとりの生徒に、それぞれ短い独唱部分を受け持たせたのだったが、鈴世はおおきく音程をはずし、みんなのからかいの的になったのだった。

男どもは、「オンチ、オンチ」と、鈴世を馬鹿にしてわらっていた。女子たちは、「えー、いけないだよ、そういうこと言ったら」などと、一応は男子をいさめながらも、くすくすわらいながら鈴世が歌うのを聞いていた。

鈴世の声はフラット、つまり、あるべき音程より、常にかすかに低かった。先生は、練習のときから、もう一度、もう一度と、鈴世にやり直させたが、結局、音程が正しくなることはなかった。

智樹はそのとき、鈴世を意識した。③鈴世のからだを強く意識した。智樹には容易にできることがどうしてもできない肉体がそこにあった。ほかのひとの音程に合わせることはできない、それ自体だけでしか存在できない、とにかく独特の肉体なのだった。

歌えないからだを初めて目の当たりにして、智樹はただ驚き、不思議に思った。他の友達のように鈴世をわらわなかったのは、それは智樹がいい子だからではなく、歌えない子もいるという現実には驚いていたからだ。

歌えない鈴世を孤独だと思ったが、誰よりも歌える自分も孤独だった。二人はまるで違うのに、孤独という意味では仲間だった。

(小池 昌代『雲雀』による)

問一 ——— ①「鈴世は少し警戒した」のは、なぜですか。

問二 ——— ②「でも人間は、雲雀ではない」とは、どういうことですか。

問三 ——— ③「鈴世のからだを強く意識した」とありますが、なぜ「からだ」を意識したのですか。

☐三 カタカナは漢字に直し、全体をていねいに大きく一行で書きなさい。

ワラウ門にはフク来る

平 2 9
中
国
6
6

四 次の詩を読んで、あとの問いに答えなさい。

名乗るほどの者ではない

伊藤 芳博

ゲームセンターで恐喝があった
それを止めて

丸く収めた高校生がいたということだ
彼は店主に名前を聞かれると

「名乗るほどの者ではない」とだけ言って
そそくさと立ち去ったそうだが

しかし 感激した店主によって
すぐに彼の身元は判明し

本校の2年生の生徒 小山君だと分かった
言うまでもないことだが

(言う必要があつて言えば)
本県では高校生のゲームセンター出入りは禁止されている

「名乗るほどの者ではない」だなんて
実は名乗れなかったんだ

本校の生徒指導担当である僕は
この話が大いに好きだ

店主のお礼の言葉を背に受けながら
ドアの向こうに消えてゆく少年の名前を

僕も知らない

〈注〉

恐喝……おどして金品を無理に出させること。

生徒指導担当……ここでは、生徒に規則を守るよう指導する役割の先生。

問一 「感激した店主」とありますが、なぜ「店主」は感激したのですか。

問二 「この話が大いに好きだ」とありますが、なぜ「僕」はこの話が好きなのですか。

四	
問二	問一

三

二		
問三	問二	問一

一			
問四	問三	問二	問一

評 点

解 答 用 紙

平 2 9 — 中
国

--

--

受 験 番 号
氏 名